

中国における日本研究の現状

——特に日本文学の研究を中心として——

朱 柏 智

(一)

中国における日本研究は、故大平首相の訪中を機に、中華人民共和国の黄鎮文化部長と日本の大来佐武郎外相との間で、「文化交流の促進のための日本政府と中華人民共和国政府との間の協定」が締結されてから、新しい段階に入った。すなわち、翌八〇年八月、中国社会科学院に日本研究所が仮設され、一年間の準備期間を置いて、八一年五月一日に正式に発足、活発な研究活動を開始したのを始めとして、今日では、天津社会科学院・吉林省社会科学院・吉林大学・東北師範大学・遼寧大学・河北大学などに、日本研究所が設けられているし、上海社会科学院・

広東省哲学社会研究所・天津南開大学・上海復旦大学などには、立派な日本研究室がある。以下、簡単にそれらを紹介しよう。

中国社会科学院日本研究所（北京市地安門東大街）

中国社会科学院（名譽院長 胡喬木。院長馬洪）には、三十二の研究所と二つの研究センターがある。日本研究所の任務は、日本の経済・政治・対外関係・社会・文化などの各分野を研究し、その成果を、中国の現代化と対日関係の進展に役立てることにある。当面の課題としては、日本の歩んだ道、当面の情勢、今後の予測について研究し、その見方を提起し、併せて全国の日本研究活動を調整することが、目論まれている。その機構は、

所長 何方 副所長 未詳

（研究員二八名・業務補助員六名・行政員七名・計四

一名)

- (1) 日本政治研究室 主任 何倩 研究員十名
 - (2) 日本経済研究室 主任 王宗林 研究員十名
 - (3) 日本社会・文化研究室 主任 未詳 研究員六名
 - (4) 図書資料室 主任 吳玉琪(兼) 事務室 主任 吳玉琪
- 備考、中国社会科学院に附属する経済研究所、農業経済研究所・財物資経済研究所・文学研究所・外国文学研究所・語言研究所・歴史研究所・近代史研究所・考古研究所など、関連する他の研究所にも、日本の歴史や文化に通じている人は少なくない。例えば、外国文学研究所東方文学研究室の主任李芒は、俳句研究の専門家で、「日本古典詩歌選」(人民文学出版社)を近く出版されるという。「日本文学研究会」の副会長でもある。同じ研究所の研究員李徳純先生も、日本文学研究会の理事で活躍されているというように、日本研究に従事している学者や関心を寄せている所員は、かなり多いことを付け加えて置こう。
- 又、中国社会科学院には、院長に直属する「研究生院」の制度があり、他の大学の大学院やそれ以上の水準で、研究生がそれぞれの分野で、専門的な研究を指導教官のもとで独自に行うことが出来る仕組みになっている。目下のところ、

その実数はつかめないが、これら研究生の中からも、日本研究の専門家が出てくるものと期待される。

天津社会科学院日本研究所(天津市)

所長 (不明)、副所長 呂萬和・劉劍喬・盛繼勳・王金林

(1) 日本史研究室 主任 王金林(兼) 研究員九名

(主な研究テーマ) 日本史・中日関係史・現代日本・日本の宗教など。

(2) 日本経済研究室 主任 盛繼勳(兼)、研究員六名

(主なテーマ) 日本のインフラストラクチャー、日本の金融、日本の貿易。

(3) 日本教育研究室 主任 劉劍喬(兼) 研究員六名

(主な研究テーマ) 日本教育史、中日両国の大学入試制度の比較研究、日本における創造力を伸ばす教育の研究、日本における産業教育、戦後の日本文学。

(4) 資料室 孫祥澍 図書資料管理員五名

(5) 他に、兼任副所長 特約研究員若干名

吉林省社会科学院日本研究所(長春市建設街)

所長 孫繼武 副所長 金泰相 高書全

(1) 経済研究室 主任 金泰相(兼) 研究員九名

(2) 歴史研究室 主任 張声振 研究員七名

(3) 滿鉄史研究組 組長 解學詩。
吉林大学日本研究所（長春市解放大路）

吉林大学での日本研究の歴史は古い。大学の発足当時は、各学部に所屬する形で、日本經濟・日本政治・日本歴史・日本文学などの研究室が設けられていたが、文化大革命を経て、一九七二年には総合され、七九年に日本研究所の設立を見た。現在では國の指定する重点大学として、研究・教育の両面に力を注ぎ、大きな成果をあげている。（重点校というのは、例えば、中国人民大学（ソ連研究、西安の西北大学（イラン・イラク研究）、成都の四川大学（インド研究）、漢口の武漢大学（アメリカ研究）、広州の中山大学（東南アジア研究）などのように、國家の要請する重要な研究課題を委託されている大学である。その機構は次の如くである。

所長 徐愷 副所長 任文俠 鄒鈞
(1) 日本經濟研究室 主任 余尙彫 副主任 孫雅軒 研究員七名

(2) 日本經濟管理研究室 主任 白成琦 副主任 呂有晨 研究員七名

(3) 日本政治研究室 主任 李完燮 研究員六名
(4) 日本歴史研究室 主任 陳本善 研究員五名

(5) 日本文学研究所 主任 孫利人 研究員五名
(6) 中国關係史研究室 主任 蘇崇良 研究員二名

東北師範大学外国問題研究所（長春市）

所長 鄒有恒 副所長 李樹範 宋紹英

(1) 日本政治經濟研究室 主任 姜孝若 副主任 華国学 研究員十名

(2) 日本歴史研究室 主任 楊孝臣 研究員七名

(3) 日本文学研究室 主任 呂元明 研究員六名

(4) ソ連研究室 主任 許維新 研究員十名

(5) 他に、事務室、資料室、図書室があり數名の研究生がいる。

遼寧大学日本研究所（瀋陽市）

所長 任鴻章 副所長 金明善

(1) 日本經濟研究室 主任 金明善（兼）研究員十名

(2) 日本歴史研究室 主任 朱守仁 副主任 易顯石 研究員十名

(3) 日本政治と文学研究室 主任 平獻明 研究員六名
河北大学日本研究所（保定市合作路）

所長 鍾毅（兼） 副所長 劉宗凱 劉北路 孫執中
(1) 日本政治研究室 主任 徐桐生 研究員二名

(2) 日本経済研究室 副主任 楊書臣 研究員八名

(3) 日本教育研究室 主任 趙秀琴 副主任 李永連 研究員三名

(4) 圖書資料室 主任 馬曉塘 資料員二名

(5) 事務室 工作人員二名

以上の他にも、例えば遼寧省社会科学院外国社会科学情報研究所（瀋陽市和平区。所長 王曉生）にも、経済研究室・歴史研究室・哲学研究室・教育研究室・資料室があつて、日本研究は重点的に行われているが、今は省略する。

以上の研究機構を一瞥すれば明らかのように、中国での日本研究は、経済・政治・歴史・中日関係・農業技術・理化学方面の研究調査が主で、日本文学の研究は、まだ高い水準にあるとは言えない。

しかし、日本文学の研究がおろそかにされているとか、著しく立ち遅れているとかいうことにはならない。後で述べるように、解放前には見られなかつた程、古典文学から近・現代文学までの多くの作品が翻訳されているし、研究も活発に行われているのである。今日、中国における日本語の学習熱は、極めて盛んなものがある。高級学年では、教材としてしばしば文学作品がとりあげられ訳解が行われているから、翻訳によるだけで

はなく、日文による訳者も、次第に多くなつてくるわけで、その中からすぐれた研究者が輩出することも、今後に期待されるわけである。

(二)

研究機構の整備と共に、日本史研究会・日本経済研究会・中日関係史会・日本文学研究会・中国日語教学研究学会などの学会も、相繼いで創立された。会員は、それぞれ百名から二百名ぐらいらしいが、研究活動は次第に盛んになりつつある。

日本文学研究会は、一九七九年九月長春で結成総会を兼ね、第一回研究討論会を行った。そして、名譽会長に夏衍先生、会長に林々先生（中国人民対外友好協会副会長）、副会長に李芒先生を推し、李芒と東北師範大学の呂元明、北京大学亜非（アジア・アフリカ）研究所の卞位強の三先生が中心となつて、運営に當つている。

研究討論会は、第二次討論会（一九八二年）を経て、昨八五年には、五月三十一日から六月九日までの十日間、河南省洛陽市河南師範大学で、第三次討論会を行った。参加者百二十名、提出された論文五十余篇で、質量ともに前回をはるかに上廻る内

容のものであったと報告されている。この大会での李芒先生の開会の辞によると、完全な統計ではないが、この三年間に発表された日本文学の翻訳小説六百篇、うち単行本八十余部、話劇脚本二十五篇、うち単行本二部、テレビ・ドラマ脚本四十五篇、散文四十篇、詩歌一千首、単行本四部、文学史一部、文芸理論その他二十篇、中国の研究者の論文百七十余篇、専著も二部あるという。今後の問題としては、よりすぐれた翻訳、より水準の高い研究が求められるわけで、そのためには作品の科学的な分析と芸術的な評価を試みることに、又どのような問題が残されているかを探究することが大切であると指摘された。会は、古代・近代・現代・当代の四分科会に分れて、熱心な討議が行われた。又、呂元明先生の開会の辞によると、参加者の大半が解放後に育った中高年の人及び青年であったことが特徴的な現象で、中国における日本文学の研究は、今後益々盛んになるであろうと考えられる。

日本文学会に関係の深い学会として、一九八〇年九月二十九日、北京大学で「北京中日文化史研究会」が結成され、鍾敬史・汪向榮・卞位強三先生はじめ十一名の理事が選出されて、活発な活動を始めているし、最近では、「比較文学研究会」の成立も見られ、その立場からも中日文学交流の跡や両国文学の特色を

探ろうと試みている人もある。又、同年十月五日から十日までの五日間、遼寧省旅大市（大連）で「東北地区中日関係史研究会」の第一回学術討論会が開かれ、東北三省を中心に、中国各地から二百名の研究者が参加し、日本からも四名の先生方が見えられて、古代（徳川時代まで）・近代（清末～五・四時代まで）・現代（九・一八事件以後）の三部会に分れて討議が行われた。この会は、東北師範大学の鄒有恒先生を理事長に、遼寧大学の関捷先生を副理事長に推し、「中日関係史研究通訊」（不定期）を出している。

こうした学会活動は極めて盛んである。一九七九年十二月には、香港中文大学中国研究所の主催で、「中日文化交流国際シンポジウム」が三日間にわたって行われ、英・美・カナダ・オーストラリア・フランス・フィリッピン・マレーシア・韓国・日本・中国（台湾を含む）の学者六十余名を集め、考古・歴史・政治・経済・文化の各方面にわたって意見が交換され、三冊の報告書も出版されている。このシンポジウムには、中村忠行先生も出席されて「日中文化交流の一視点」という研究を発表されているのが、私どもの注目を惹く。

翻訳や研究に先立って必要なのは、日本語の学習である。今

日、中国における日本語の学習熱は空前のもので、全国で百以上の大学に日本語の講座が置かれ、二千人以上の学生が日本語を学んでいると推測されている。学生のほかにも、日本語を学習している人は多いはずで、NHKの日本語講座は、用意された八千部のテキストが数日のうちに全部売り尽されたとも聞いている。このような状況下にあつて、一番問題となるのは、教師の不足である。

この問題を解決するために、一九八〇年以来、北京語言学院に「日語教師培訓班」(日本語研究センター。俗に「大平班」)が設けられ、全国の各大学における中国人の日本語教師六百人を、向う五年間に養成する計画が立てられ、毎年百二十人ずつ、一年間合宿させて教育することとなり、国際交流基金の援助(五年間で約十億)を仰ぎ、日本からの先生の派遣、教材・器械の提供を受けている。学生は、各大学の講師・助教(日本の助手に当る)で、一般研修・特別講座の他に、日本事情の研修があり、三十六週間二百五十二日の授業と五十日の自宅研修があり、うちに一月間の訪日研修が課せられることになっている。授業は三十名ずつ、四クラス、午前は四時限の授業、午後は研究会、土曜日の午後には公開の特別講義があつて、かなり激しい訓育が行われている。今、私の指導教官である阪倉篤義先生も、招かれ

てこの培訓班で教えて下さったことが二度ある。有難いと思う。この培訓班の学生については、早稲田大学教授で、やはり教鞭をとられた木村宗男先生(現在、社団法人日本語教育学会専務理事)の興味深い調査があるから、要点をまとめて次に表示しよう。中国における日本教育の概況が、ある程度つかめるところからである。調査の対象は、全国の各大学から選抜された百二十名(男七十五名、女四十五名)で、講師五十五名・助教六十五名である。

(三)

中国に近代日本の文学が紹介されたのは、清朝の末期日本に亡命した梁啓超らの政治小説に始まるが、すぐれた翻訳が見られるようになったのは、やはり「文学革命」以後のことである。この時代に活躍した魯迅・周作人兄弟・郭沫若・張資平・郁達夫をはじめ、演劇界に功績を残した李叔同(弘一大師)・歐陽予倩・田漢などは、皆日本に留学した人たちばかりで、従つて影響も見られた。石川啄木の短歌や俳句の影響を受けて「小詩」という新しい詩型が生まれたのもその一例である。昭和初期の日本のプロ文学と左翼時代の作家、作品との交流も密接である。

所属学科別	学 歴	専攻別(大学での)	日本語の学習歴	教 授 歴
日本語科 79名(68%) 理工系(日語)22(19%) 医・楳楳・貿易 7(6%) その他 8(7%)	大学卒 104名 専門学校卒 7 中・高卒 2 大学中退 2	日本語 103名 ロシア語 7 英 語 2 化 学 1 化学楳楳 1 電子工業 1 日本歴史 1 日本経済 1 数 学 1 その他 2	1～7年 104名 8～10年 2 10年以上 2 日本で小・中学校に学んだ者 1 母親が日本人 1 その他 10	2～3年 42名 5～6年 26 7～8年 14 15～16年 7 18～22年 3 その他 22
担当クラス低学年基礎 総合 71名	1校当りの教員数	日本人教員数	教 科 書	
(現在) 文法 23名 高学年と 読解 13 (経験) 初 級 51 中 級 47 上 級 28 研究員 7 理工系 20	2～10名 35校 11～20 22 21～30 7 31～40 2 120(大連外国語学院) 1	6～7名 3校 (大連外国語学院・ 上海外国語学院・ 北京外国語学院) 1～3 30 ナ シ 35	○東京外国語学校附属日本語 学校編「日本語」1～3 22校 ○湖南大学編 理工系用 教科書 15校 ○上海外国語学院編 教科書 12校 ○北京大学編 教科書 7校 ○天津大学編 理工系用 教科書 5校 ○日本の中・高校 教科書 6校	
将来の希望	将来の専攻分野	日本語を学んでむずかしく思う部分		
高学年・読解担当 46名(40%) 低学年・基礎担当 (現在のまま)7名 日本文学史 5 翻 訳 5	文 学 38名 音声・音韻 9 言語学 7 文学史 2 経 済 2 日本事情 1	助 詞 50名 文法全般 30 類 似 語 25 敬 語 20 日本事情 19 助 動 詞 18	慣用句・慣用法 15名 文 語 14 発音・アクセント 10 作文添削 10	

謝六逸教授の「日本文学史」・「日本的文学」(三冊)といった便利な研究書も出て、中国人の日本文学に対する関心は大きく高まった。しかし、こうした流れは十五年にわたる日中戦争によって途絶えてしまった。

解放後、一九六三年から六六年にかけて、小林多喜二・徳永直・宮本百合子の全集が出たのをはじめ、二葉亭四迷・夏目漱石・志賀直哉・壺井栄・野間宏・木下順二・三島由紀夫の作品が紹介されたり、江蘇省から「訳林」という雑誌も出版されたが、「文化大革命」期に、その風潮は根絶やしにされてしまった。そしてこの十年、上に一寸触れたように、日本研究は大いに進み、日本文学の翻訳・研究も盛んとなってきたのである。

今、それらを細かに述べるゆとりはない。中国にどのような作家と作品が紹介されたかは、実藤恵秀先生の「中訳日本文書目録」(国際文化振興会刊)や譚汝謙先生編「中国訳日本書綜合目録」(香港・中文大学出版社)があって、単行本となったものは大要がわかるが、雑誌掲載のものには及ばない。東北師範大学外国問題研究所日本文学研究室編「五・四運動以来日本文学研究与翻訳目録」が「日本文学」第一号以下に見えるけれども、これまた十分ではなく、完全な目録がまだ出来ていないからである。

そこで便法として、右の「日本文学」について紹介し、説明

に代えることにする。この雑誌は、東北師範大学外国問題研究所日本文研究室によって編輯され、吉林省長春市の長春書店から創刊された日本文学専門の雑誌である。(編輯者は、後に「日本文学編輯部」に、発行所も「吉林人民出版社」と移り、現在は、姜念東主編・李長声副主編に改まっている。その第一号の目次を掲げると

(随想)

日本文学研究随想

林 林

我在日本参加左翼诗歌运动的日子

雷 石榆

翻译工作的回顾

任 鈞

(水上勉代表作特集)

越前竹偶(中篇小说)

吳 樹文訳

稻草人(短篇小说)

李 明作訳

竹偶之泪(评「越前竹偶」)

李 思業

(小说名篇)

国木田独歩

春 鳥

劉 光字訳

司馬遼太郎

美濃浪人

繆 偉 訳

山川方夫

夏天的葬列

笑 愚 訳

(詩歌)

中野重治詩選

臨 江 訳

俳句・短歌

悼周總理 周 豊一

(論評)

不安の文学論——芥川龍之介的創作道路 劉 春英

思想・联系と発展 倪 玉

少年主人公の文学論——小川未明の童話創作 莽 永彬

無畏の人——中島健蔵 呂 元明

有吉佐和子の創作 文 潔若

七十年代日本現代主義的幾個小流派 唐 月梅

略談日本近代小説

萬 蘭

談日本經濟題材小説

馬 興國

評科幻小説「日本沈没」 星 岱

緑川文学

(中日文学交流)

日本文学在中国的研究和紹介 李 芒

五・四運動以来日本文学研究与翻訳目録 東北師範大学外

国問題研究所日本文学研究室編

(以下略)

この雑誌には、毎号のように、芥川龍之介・有島武郎・菊池寛・井上靖・金子光晴・石川達三・林芙美子・松本清張などの作家や唯美派の特輯を行い、作品研究も永井荷風・谷崎潤一郎・島崎藤村・川端康成など、かおりの高い純文芸作家や作品が取

上げられていて、プロ文学に関する研究は極めて少ない。それと共に呂元明の「江戸文学」といった古典の研究も見えて、従来の日本文学の翻訳や紹介とは全く質を異にしているし、水準も高いものである。これは大いに注目してよい現象であろう。

又、緑川英子(本名 長谷川照子)という反戦文学・抵抗文学の作家が、中国では高い評価が与えられ、研究されていることも指摘しておきたい。恐らく彼女の名前と作品は、これまでに日本で出版されたどの文学史にも辞典にも、見出せないだろうと思われるからである。そして、若し、フランスの詩壇でまだ認められなかった「悪の華」の詩人ボードレールの価値を、ポウがいちはやく見出し、ピエル・ロチをラフカディオ・ハーンがはやくから推賞していたことのように、中国での緑川文学の評価が日本でも認められるようになったとしたら、それはすばらしいことだと思ふ。

「日本文学編輯部」では、また翻訳人材を養成し、翻訳のレベルを高め、日本文学研究を促進させ、中日両国文学芸術交流を促進させるために、毎年、日本文学作品翻訳コンテストを行っている。昨年は吉林大学言文学部と日本文学編集部とが連合して、横光利一の「笑はれた子」を課題として行った。今年の課題は梶井基次郎の「愛撫」である。

これらの応募訳は、いずれも若い学生の翻訳であるから間違
いも多いと思われる。「日本文学」(一九八五年第四期)には、そ
の調評が見えている。例えば、

「今度は駄目だった。で、瓶の口へ鼻をつけた。」という個
所を応募訳は原文の意味を理解せず、誤って「這次不行了。
因為他把鼻子湊到瓶口上了」と訳したものが多かったとい
う。

実は、この文は、お吉がお酒を飲む場面の一つの描写である。
本来の意味は「這次控不出来了。于是他把鼻子湊到瓶口上」と
いう意味である。何故間違つて訳したのか。その原因を分析し
てみると、「駄目だった」ということはの文脈の意味が納得でき
ず、ただ、基本的意味だけをそのままに訳したものと見られる。
「駄目」という言葉の基本的意味は、「不行」「白費」などの意
味であるが、この文ではそう訳してはいけない。

翻訳する場合、先ず第一に、原作の事件の流れについていつ
て読むことと、物語の型に従つて原作の本来の意味を充分に納
得できるまで読むことは大切だと思ふ。そうしないと、今の例
のように訳文は原文の意味に合わず、怪しくなってしまう。

また、原作の最初の文であるが、「吉をどのような人間に仕立
てるということについて……」を「関于把阿吉培養成什么人の

問題……」と訳した例が少なくなかった。確かに日本語の「……
について」という文型は、中国語の「関于……問題」に相当す
る。けれども、例文のように訳しては、言葉としては間違ひは
なく、正しい表現であるが、どことなく固苦しい感じがする。
むしろ、「関于……問題(……について)」を略した方が自然ではな
いか。

翻訳する時、ただ文法的に、意味にだけこだわって、言葉の
表現習慣を重視しないと今の例のようになってしまふのではな
いか。というのは、民族によつて言葉の表現習慣がそれぞれ違
うからである。日本語をそのまま中国語に訳しては、中国語に
ならないし、その反対に中国語をそのまま日本語に訳しては日
本語にならない。原文の意味を充分に理解した上で、言葉の表
現習慣を大切にすることが肝要である。

最後の一例であるが、「包を仕上げて……」を「收拾好荷包」
と訳した例が多かった。「收拾好荷包」という訳は、意味も通じ
るし、表現的にも申し分がない中国語である。けれども、この
時代は日本の大学生も風呂敷で本を包むのが普通であった。今
のような学生用カバンが用いられたのは、そのあとの時代であ
るらしい。だから、「收拾好荷包」のかわりに、むしろ「包好書」
と訳した方が時代感覚が、よくでてくるのではないか。

言葉は、時代性があるから、翻訳するにはその民族の歴史・風俗習慣・国民性などの知識を持つことが重要である。

要するに、翻訳は、ただ言葉の一对一の交換ではなく、一種の言葉をもう一種の言葉につくりなおす技術的な再創作である。翻訳の難しさもそこにある。

原文の意味を正しく理解すること、意味がよく通ること、言葉の表現が美しく、文学的であることが大切で、「信・達・雅」の三点が要諦である。

こうして鍛練された翻訳文学の担い手達は、やがて次の時代を背負って立つに違いない。中国では、既に「日本古典文学叢書」と「日本近現代文学叢書」という合計六〇巻にも及ぶ叢書が出版されているが、今年からは、李芒先生主編、李徳純・高慧勤両先生副主編のもとに「日本文学流派代表作叢書」四十四巻が、福建の七家出版社から出版され、八八年末までに完結の予定で、予約の広告がされている。

最後に、これまで日本文学を翻訳した人々がどのような道を歩んで来たか、一つの例として、済南市の山東大学外文系日本語科の金中先生（五十七歳）の「風にそよぐ葎」の翻訳についての二三事——「石川達三先生と私」という文章の一節を抄出し

て、結びとしたい。この文章は、一九八三年第四回日本語作文コンクールで入賞し、日中人文社会科学交流協会賞を贈られたもので、審査には国立国語研究所日本語教育センターの第四回研究室長菱沼透先生が当られた。金中先生が、どんなに石川達三の文学を愛し、日本文学研究に精進しているかが分るのである。中国には、こうした熱心な研究者が多いし、今後ますます増えると思うのである。

いまから四十年前のことである。一九四〇年の夏、私は上海の四馬路のある古本屋で石川達三の「生きている兵隊」の中訳本を買って興味深く読んだ。一人の日本の作家として、中国の戦場において日本の軍人がやっておった真実の姿を知らせたという胆識に敬服をせざるを得なかった。あのとき、私は日本文学にはほとんど無知の状態だったが、しかし、石川達三の小説に私はひどく心を打たれ、石川達三という名前は私の脳裏に深く刻み込まれたのである。

石川達三先生は一九五六年、わが国を訪問され、帰国後、朝日新聞に「中国は変わった」という長篇のルポを発表された。それには石川達三先生が十八年ぶりに中国を訪れたときの生々しい感じが、紙上に躍動していたのである。それから、一九五七年、石川達三先生は朝日新聞に長篇小説「人

間の壁」を連載された。一九五四年の教育二法案をめぐる政府・保守全勢力と日本教職員組合との大闘争の全経過を描いたこの小説によつて、私はより一層石川達三に対する尊敬と信頼が深まった。私は日本文学に対する深い関心を持ち始めたのは、石川達三の作品からといつてもよいぐらゐである。

一九五八年二月、石川達三先生は尿に自ら署名された「風にそよぐ葦」の文庫本を私に送つて下さった。当時の私はすでに政治的な迫害を受けており、「右派」というレッテルを貼られていた。一九五八年四月、私は家族と別れて、北京を離れ、河北省唐山のある国营農場へいわゆる「労働鍛練」に行かされた。わずかの所持品のなかに、私は貴重な本「風にそよぐ葦」を入れて持つて行つた。私は働きながら、その小説の内容を同じく労働させられていた張天水さんに読んで聞かせてあげた。私と張さんの間柄は、恰も主人公宇留木武雄と葦沢泰介のようなものだった。張さんはいつも憂鬱で、泰介の運命がいつか自分の頭上にふりかかるとではないかと心配そうな顔をしていた。

「お前はこれを翻訳したらどうだ。いまのところ出版することはできないだろうが、手書きの本にして、みなに読

ませろ。われわれの言いたいことを石川達三がちゃんと代言しているではないか」と張さんが提案した。

毎日十時間以上の重労働で、夜になると、くたくたにつかれて、とても翻訳するどころではなかった。それにもかかわらず、一九五九年の冬までに、私は「風にそよぐ葦」の前編の四章ばかりを翻訳した。張さんをはじめ、四、五人の仲間がこの手書きの本を次から次へと廻して読んでくれた。

一九六一年、私はようやく労働を解除され、山東省のある農村の中学校の英語・ロシア語の教師になつた。私は専門の日本語を捨てて、あまり知らなかつた英語とロシア語を勉強しながら、何とか学生たちに教えていった。授業、労働、学生たちの宿題の訂正に追われていては、翻訳なんかはとても考えられない贅沢な願ひであつた。

一九六六年六月、あの「文化大革命」が起こつた。その年の十一月、私の一家はどういうわけか解らないまま、学校からへんびな田舎に追いやられた。そのとき、私の家はすでに二回ほど「抄家」(家財を差し押えられること)された。私のわずかの所持品の中で貴重な本「風にそよぐ葦」は、その訳本と一緒に子供の綿入れの服のなかにかくして、

田舎へ持っていったのである。

十五歳の長男と十歳の長女は学校へ行くことさえも許されず、親と一緒に労働させられていた。たとえ親たちに罪があつても、子供にまでもその罪を負わされる理由はない。田舎にいた十年、その最初の三年間、私は牛や馬の飼料としてのまぐさを切る仕事をやっていた。一緒にこの仕事をやる相手は七十五歳の貧農のお爺さんだった。私はひまをぬすんで、「風にそよぐ葦」をくりかえし読んだ。夜になると、私はリングの空箱のうえの小さな石油ランプの弱い光をたよりに、再び「風にそよぐ葦」を翻訳しはじめた。その時、家族は御飯を腹一杯食べられなかったので、原稿用紙を買うだけのお金もなかった。仕方なく子供の算数のノートの下にぎっしりと細い文字で書いたのである。

「あなたはこんなに瘦せてきたし、殊にご飯も食べていないし、あしたはまた重労働があなたを待っています。早く休みなさい。こんな出版の見込みもない小説を翻訳したって、何も役に立たないではありませんか。まず体を大事にして下さい」と女房から何回となく言われた。

「お前はやはり女だ。男のやつていることは分らないのだ。俺がいま言いたいこと、言えないことを石川達三先生

は代言してゐるではないか。いまのところ出版することはできないが、お前一人にだけ読んでもらえたら、俺は満足なのだ。あと十年、或いは二十年経ったら、この本を出版する時代が必ずやってくる。私はそう堅く信じてゐる。」私は強い口調でこう言った。

泰介は広瀬軍曹に蹴とばされ、負傷して、静岡の軍隊病院に入院させられた。榕子は東京からわざわざ見舞に行つたという一節を読んだとき、女房は涙ぐんでいた。彼女は心配そうな顔をして、私の手をとり、

「あなた、大丈夫かしら、こんな小説を翻訳したら、またひどい目にあわされるかも知れませんよ。村の造反派は広瀬軍曹よりもっとひどいではありませんか。おやめなさい。私は怖い」と言った。

予想してゐたことは思つたより早くやつて来た。一九六九年春のある晩、私は熱を出して、オンドルの上に横になつてゐた。いきなり村の小隊長が造反派を率いて、私の家に踏み込んで来た。何の理由も言わず、私をオンドルの上から引きずり起こして、びんたをくらわせ、蹴とばした。私は顔じゅう血まみれになつて、倒れてしまつた。

「馬鹿野郎！お前は毎晩何を書いてるんだ。お前は執筆

一切禁止を知らないのか。書いたものを全部出せ！そうでなかつたら殺すぞ！」

私の家にあるすべてのものはひっくりかえされ、「風にそよぐ葦」の訳稿の一部を持って行かれた。さいわい、その原書と大部分の原稿はあの貧農のお爺さんの家に頼んで保存してもらつてあつたので難を免れた。

一九七六年十月、「四人組」が粉碎され、私はようやく解放された。一九七九年九月、私は長春で開かれた第一回国語日本文学討論会に出席させてもらった。その会議では、石川達三先生の作品について、正しい評価がなされた。また、会議の最後段階で「全国日本文学研究会」が成立され、私はその研究会の理事に選ばれた。

長春会議から帰つて後、私は石川達三の小説の翻訳に専念した。この三年間、「金環蝕」「骨肉の倫理」、「青春の蹉跌」、「傷だらけの山河」を翻訳し、それぞれ出版された。

石川達三先生は「風にそよぐ葦」の中訳本のために序文を書いて下さつた。石川達三先生は「これは私の悲しみの記録です」と言つておられるが、私も又、「風にそよぐ葦」の翻訳に従事して以来、二十年以上悲しみと憤りに満ちた長い歳月をすごして来たのである。

「風にそよぐ葦」の中訳本を出版するにあつて、「文化大革命」に生き残つた私は、全力をあげて、石川達三先生の主な作品を中国の広はんな説者に紹介しようと決意したのである。そして中日両国の文化交流がますます発展していくよう折つてやまない。(一九八三年二月一八日)

〔附記〕 本稿を執筆するに当つて、中村忠行先生に多くの資料を拝借し、また親切なご指導を頂きました。銘記して、心より感謝の意を申し上げます。(一九八六年九月)